

## 2025年4月6日（日）「最終的な勝利者」

ヨハネの黙示録 12:1-6

1 また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が太陽を身にまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。2 女は身ごもっていて、産みの痛みと苦しみのために叫んでいた。

3 また、もう一つのしるしが天に現れた。それは巨大な赤い竜であって、七つの頭と十本の角を持ち、頭には七つの王冠をかぶっていた。4 竜の尾は、天の星の三分の一を掃き寄せて、地上に投げつけた。そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ち、生まれたら、その子を食い尽くそうとしていた。

5 女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖であらゆる国の民を治めることになっていた。子は神のもとへ、その玉座へと引き上げられた。6 女は荒れ野へ逃げた。そこには、この女が千二百六十日の間養われるように、神の用意された場所があった。

### 【序論】

ヨハネの黙示録は 22 章までありますから、ちょうど半分学び終えたことになります。今日から 12 章に入りますが、全体として不思議な描写で満ちています。「一人の女」「赤い竜」「男の子」という三者が登場しますが、これらは何を意味しているのか。著者は何かを象徴的に表現し読者に伝えようとしているのですが、第一世紀の読者たちはこれをどう読み取ったのでしょうか。書かれた時代から 2000 年以上経った今これを読んでいる私たちにとって、この記事は何を意味するのか。長年聖書を読んでまいりましたが今ひとつ意味が掴めなかった内容を、この度丁寧に学ぶ機会が与えられました。

### 【本論】

12 章全体は以下のような内容になっています。

- ①1-6 節……子を宿した女と赤い竜
- ②7-9 節……ミカエルと竜の戦い
- ③10-12 節…天に響き渡る声
- ④13-18 節…竜から逃げる女

#### 本論 1. 一人の女

また、天に大きなしるしが現れた。一人の女が太陽を身にまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた。女は身ごもっていて、産みの痛みと苦しみのために叫んでいた。(12:1-2)

ここに登場する「一人の女」とは、男の子を身ごもっていることからして、主イエスの母マリアを連想させます。しかし、「太陽を身にまとい、月を足の下にし、頭には十二の星の冠をかぶっていた」という出立ちであることから、貧しき少女であったマリアと同一視することには無理があります。中世の教会ではこの女を「聖母マリア」と理解していたようですが、今日の多くの学者はその説を否定しています。むしろ、彼女の装いの意味を読み解いていくとき、彼女が何者なのかが分かってくるでしょう。

まず「太陽」「月」「十二の星」という天体が「イスラエル十二部族」を象徴する表現であることを、旧約聖書の一つの箇所からイメージすることができます。

ヨセフはまた別の夢を見て、それを兄弟に話した。「私はまた夢を見ました。すると、日と月と十一の星が私にひれ伏していたのです。」(創世 37:9)

これはヤコブの十一男ヨセフが見た夢ですが、ここでは「日」は父親、「月」は母親、「十一の星」はヨセフの兄弟たちを表しています。ヨセフ自身を含めて十二人の息子、ここからイスラエル十二部族は形成されていきました。「太陽を身にまとい」とは栄光をまとった状態。「月を足の下にし」とは、当時は月の動きを基準に時の経過を計ったことから、これは「時の支配」を意味すると思われまゝ。更に、「頭には十二の星の冠をかぶっていた」とあることから、この「女」はイスラエル民族の栄冠を戴いている存在であることが窺えます。

つまり、私が読み取るところ、この「女」は第一に旧約におけるイスラエル十二部族を意味しており、その「産みの苦しみ」とは民族的苦難の歴史の中からキリストが生み出されたことだと思われまゝ。「産みの痛みと苦しみのために叫んでいた」という表現は何とも痛々しいですが、迫害の中で祈り続けた聖徒たちの忍耐を表しているのでしょう。主イエスの誕生のときに神殿にいた一人の老人の祈りに注目してみたいと思います。

その時、エルサレムにシメオンと言う人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。また、主が遣わすメシアを見るまでは死ぬことはない、とのお告げを聖霊から受けていた。この人が霊に導かれて神殿の境内に入った。そして、両親が幼子イエスを連れて来て、その子のために律法の定めに従っていけにえを献げようとしたとき、シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。「主よ、今こそあなたはお言葉どおりこの僕を安らかに去らせてくださいます。私はこの目であなたの救いを見たからです。これは万民の前に備えられた救いで、異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの栄光です。」(ルカ 2:25-32)

待望のメシアをその腕に抱いたこの老人は、旧約の時代を生きた最後の聖徒の一人でした。彼らの忍耐強い祈りによって、救い主はついに誕生したのです。後ほどふれますが、この「キリストを身ごもった女」には第二の意味が含まれていると思われまゝ。

## 本論 2. 赤い竜

また、もう一つのしるしが天に現れた。それは巨大な赤い竜であって、七つの頭と十本の角を持ち、頭には七つの王冠をかぶっていた。(12:3)

「巨大な赤い竜」が悪魔とその諸勢力であることは容易に想像できるでしょう。悪魔は神に敵対し、偽りによって全世界を惑わしている存在です。「赤」という色は、黙示録では悪魔とその勢力を象徴するカラーであり、実は現代においても悪魔的なシンボルとして用いられている事例が多くあります（もちろん常にではありません）。悪魔崇拝をモチーフとしたファッションショーでは赤色の衣装が意図的に用いられており、その他にも「プロビデンスの目」「六芒星」「魔女」「モヒカン」「666」「フクロウ」「片目隠し」「コルナ（角）」などの象徴的なサインが存在し、悪魔に魂を売った人々が互いに合図として用いています。世界中の多くの政治家、芸能人、モデル、スポーツ選手の間でも日常的に使われており、一般大衆がその意味を知らずに悪しきサインを真似しているような事例も見られます。キリスト者は注意深く見極めなくてはなりません。「赤」とは、怒り、残虐性、殺人などを表すがゆえに、人身売買、暴力、破壊、戦争といった事柄が引き起こされるのも頷けるでしょう。

「七つの頭」とはその頭脳と狡猾さ、「十本の角」は力と強さ、「七つの冠」は地上で有してきた権力を表しているでしょう。

竜の尾は、天の星の三分の一を掃き寄せて、地上に投げつけた。そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ち、生まれたら、その子を食い尽くそうとしていた。（12:4）

悪魔は国家そのものに入り込むことも多く、時の支配者に悪魔的行動を取らせる傾向があります。この記事はダニエル 8:10-11 が元になっていて、紀元前 2 世紀にイスラエル民族が経験した苦難が前提にあります。

その角は天の軍勢にまで力を及ぼし、その軍勢と星の幾つかを地に投げ打ち、踏みにじった。そして、大いなる軍勢の長にまで力を及ぼした。日ごとの献げ物は廃止され、聖所は打ち倒された。（ダニエル 8:10-11）

セレウコス朝シリアの王アンティオコス四世エピファネス（在位：前 175 年～前 163 年）はエルサレム神殿を冒瀆し、ユダヤ人の宗教的祭儀を禁じ、偶像礼拝を強要し、抵抗した者を多く殺害しました。その殺された者たちのことを「星の幾つかを地に投げ打ち」という比喻で表現しているのです。

時は流れ、悪魔による神の民への攻撃は形を変えて繰り返されています。その究極の出来事が、神の子イエスの命をつけ狙うヘロデ王の暴挙によって表されました。「竜は子を産もうとしている女の前に立ち、生まれたら、その子を食い尽くそうとしていた」とは、地上の支配権を脅かす存在が現れることへの焦りと怒りです。主イエスの誕生によって、神の子と悪魔の戦いが始まろうとしていました。

### 本論 3. 男の子

女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖であらゆる国の民を治めることになっていた。子は神のもとへ、その玉座へと引き上げられた。（12:5）

この「男の子」がキリストを意味することは疑いないでしょう。ここでは詩編 2:9 が引用されていますが、この詩は王の即位のときに歌われたものです。

私は主の掟を語り告げよう。主は私に言われた。「あなたは私の子。私は今日、あなたを生んだ。求めよ。私は国々をあなたの相続地とし、地の果てまで、あなたの土地としよう。あなたは彼らを鉄の杖で打ち砕く、陶工が器を叩きつけるように。」(詩編 2:7-9)

「鉄の杖」とはキリストの絶対的な支配を表します。主イエスが世に遣わされたのは、長年に亘る悪魔の支配を終わらせるため、その支配下にあった人々を縄目から解放するためです。「その玉座へと引き上げられた」とは、王として即位したことを意味するでしょう。主イエスは生まれてすぐ命を狙われ、その時点で悪魔との戦いが始まりました。荒野の誘惑が一つの決定的な対決となり、地上での格闘は十字架上で極まります。

女は荒れ野へ逃げた。そこには、この女が千二百六十日の間養われるように、神の用意された場所があった。(12:6)

さて、先に「一人の女」とは第一に旧約のイスラエル十二部族を意味すると申し上げました。しかしながら、このことばには第二の意味があると思われれます。すなわち、新約の時代に形成された主イエスの十二使徒に代表される教会を指しているとも考えられる。過去にはイスラエルの苦難の中でキリストの誕生が待ち望まれていましたが、教会は相似的な意味において終末的な大患難の中でキリストの再臨を待ち望むことになるからです。大患難をもたらすのは悪魔とその諸勢力であり、それは地上における最終戦争を意味するのかもしれませんが。

イエスは話し始められた。「人に惑わされないように気をつけなさい。私の名を名乗る者が大勢現れ、『私がそれだ』と言って、多くの人を惑わすだろう。戦争のことや戦争の噂を聞いても、慌ててはいけない。それは必ず起こるが、まだ世の終わりではない。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々に地震があり、飢饉が起こる。これらは産みの苦しみの始まりである。(マルコ 13:5-8)

終末の兆候について主イエスは弟子たちに語られましたが、ここで使われている「産みの苦しみ」という言葉と今日の箇所における「一人の女」の苦しみとの関連を見落とすことはできないでしょう。主イエスの再臨(つまり第二の出産)が近づくと、大患難はその前兆として必ず起きるのです。

私たちはどういう時代を生活しているのでしょうか。第三次世界大戦が起こるとしたら、それは経済戦・情報戦・軍事戦という三つの側面を持つと言われています。この度の関税戦争は、その経済部門と言えるのかもしれませんが。戦争はなぜ引き起こされるか。庶民は平和を望みますが、それを許さない人々がいて、誰かの利益となるために争いへと誘導する力が常に働いています。私たちはその背後にあるものを見極めなければなりません。

「千二百六十日」というのは、迫害の期間を表す典型的な表現ですが、これは「三年半」とか「四十二ヶ月」などとも言い換えられます。その苦難のとき、「一人の女」と呼ばれる教会は、「神の用意された場所」で養われると言われている。キリストが悪魔と最終的な戦いを繰り広げる時が来るでしょう。そのとき、神は何らかの意味で聖徒たちを守られるという約束であります。

## 【結論】

現在においても、闇の力は色濃く世界に影響を及ぼしています。そして、多くの為政者がその力の前に屈してきました。ゼニトラ、ハニトラ、盗聴、脅迫などによって逃げ道が塞がれてしまうのです。しかし、私たちは最終的な勝利者をしっかりと見つめて、「道であり、真理であり、いのちである方」に従い続けたいと思います。主イエスがこう言っておられるからです。

これらのことを話したのは、あなたがたが私によって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。私はすでに世に勝っている。(ヨハネ 16:33)  
イエス・キリストの背中を見ながら、一足ひと足従ってまいりましょう。

## 【祈り】

私たちの戦いは、人間に対するものではなく、支配、権威、闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊に対するものだからです。(エフェソ 6:12)

光なる神様。教会の主であられるイエス・キリストが聖なる方でいますことを感謝いたします。「わたしは道であり、真理であり、いのちである」と言われた方を主として生きる幸いを覚えます。世の終わりまで、悪の力は世界に満ちるでしょうが、如何なる時にも神の子イエスの背中をしっかりと見つめて歩み続けることができるよう、この群れを守り導いてください。サタンに心が囚われることなく、主の御霊に満たされ続けることができますように。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

聖なる方にして、光の中の光にまし給う、父なる神の愛、  
悪魔との闘いに勝利し、従う者をも勝利者となし給う、主イエス・キリストの恵み、  
霊的闘いに目を醒させ、光の武具で身を固めさせ給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。

---

<sup>i</sup> 「米国フリーメイソン・イルミナティの代表アルバート・パイクが、ヨーロッパのフリーメイソンの代表マツィーニに宛てた 1871 年 8 月 15 日付けの悪名高き書簡（とは言っても、日本ではそれをよく知る者はきわめて少ないが）については、前出 W.G. カーの著作『闇の世界史』に詳述されている。三度の世界大戦で、カナン人または悪魔の一味の世界支配（その実態は「世界人間牧場」）を完成させるという。」

（ユースタス・マリズ著／天童竺丸訳『カナンの呪い』成甲書房、2015、p. 439）

「1840 年、アルバート・パイク将軍は、自ら率いるインディアン部隊が合法的戦いの名のもとに残虐行為をはたらいたとして、ジェファーソン・ディヴィス大統領によって解散させられたことに不満をいだき、マツィーニの影響を受けるようになった。パイクは世界単一政府という考えを受け入れ、最終的にはサタンに仕える高僧の長となった。1859 年から 71 年にかけて、彼は三つの世界大戦と三つの大革命のための詳しい軍事計画を練りあげた。これによって陰謀は 20 世紀のうちに最終段階に推し進められる、彼はそう考えた。」

（ウィリアム・G・カー著／太田龍訳『教科書が絶対に教えない 闇の世界史』成甲書房、2009、p. 34）

上記のような本を読む場合、聖書解釈的に我々の立場と相容れない部分もあるので、批評的な視点を忘れないようにしたい。ここに書かれている悪魔的な計画が実現するかどうかは分からないが、歴史は着実に色濃い闇に覆われてきている。聖書に描かれている終末の預言を文字通りに実現させようとしている人々がいるが（エゼキエル書 38 章の曲解）、そのように作為的にもたらされる患難が主イエスの言われる「大患難」とイコールなのかどうか判断の難しいポイントである。現時点では「その可能性もある」とまでは言えるが、終末期がどこまで続くのかは神のみがご存じである。人間にはその日を決定することも予測することも許されてはいない。いずれにしても聖徒たちは常に霊の目を醒ましている必要がある。その日が近づいていることだけは確かであるから。